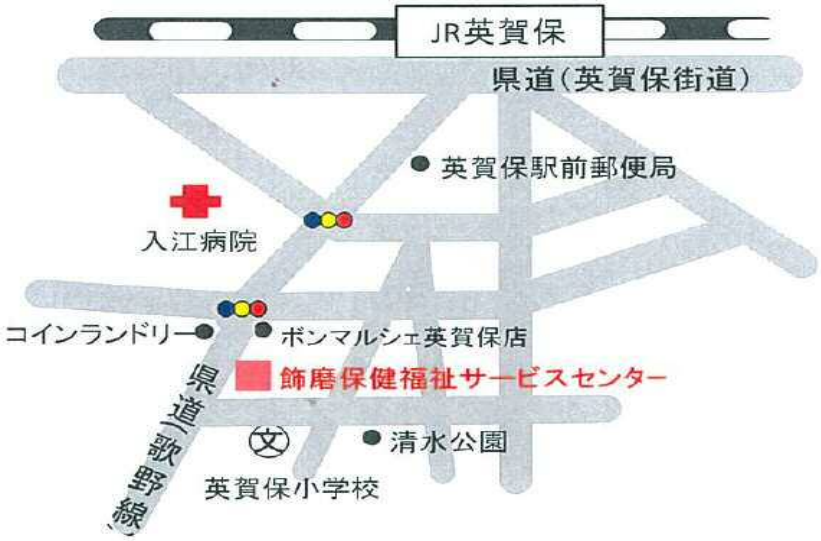
地域包括支援センター適正運営評価　基本調査票

【地域包括支援センター概要】

センター名称	姫路市飾磨西地域包括支援センター
法人名	社会福祉法人敬寿会
所在地	〒672-8084 姫路市飾磨区英賀清水町1丁目5番地1
電話	079-240-6528
FAX	079-237-8048
ホームページURL	https://www.shikamanosato.com/

【センターの案内】

センターまでの交通手段	ＪＲ英賀保駅を下車。英賀保駅前のＪＡの前を南に下がり徒歩１０分。 スーパーボンマルシェの南側にある飾磨保健福祉サービスセンター内。 駐車スペース有



【センターが所在する地域の特徴・特性】

英賀保校区（人口15,989人・65歳以上人口3,772人・高齢化率23.6%）は英賀神社、英賀城跡など歴史と文化の香る地域で、英賀神社では毎年10月17日・18日に秋季例大祭が行われ地元住民同士の繋がりが強い地区です。JR英賀保駅北側の土地区画整理事業が進行し住宅地や公園、JR英賀保駅北側改口と自由道路等の整備が進んでいます。また、製鉄記念広畑病院の跡地も校区内にあり「医療・介護ゾーン」として医療機関や特別養護老人ホーム・特定施設入居者生活介護施設が開設される予定になっています。

津田校区（人口14,054人・65歳以上人口2,902人・高齢化率20.6%）は区画整理事業により道路整備や宅地化が進みました。また臨海部は工業団地が造成されています。津田天満神社の秋祭り等などの伝統行事が各町で活発に行われており住民の繋がりが強い地区です。

校区全体では、入院病床がある病院や、看護小規模多機能型居宅介護、グループホームやショートステイがそれぞれ1か所あり、居宅介護支援事業所は12カ所、訪問系サービスや通所系サービスはそれぞれ8カ所あります。また、サービス付き高齢者向け住宅や高齢者専用住宅が5カ所あります。

【特に力を入れている点・アピールしたい点】

①朝礼の時間やミーティングを通して、地域包括支援センター内で相談対応の内容や地域活動等の情報共有を行い、チームアプローチが実施できるようにしています。
②自治会や民生委員、地域住民の方と顔の見える関係が築けるように地域行事や通いの場、社会福祉協議会の主催するふれあい給食やふれあいサロンでの高齢者に関する啓発活動を行ったり、会議や自治会の部会にも参加し、地域包括支援センターが高齢者の方の身近な相談場所であることを積極的に広報しています。
③認知症患者家族会の協力を得て認知症の方やご家族の方が気軽に話し合える場（ラフラフの会）を毎月開催しています。

【令和5年度末の担当圏域の目指す姿】

①いきいき百歳体操や認知症サロン等の通いの場の数やのべ参加者が増える。
②地域の高齢者の相談窓口である事を広報し、相談者数が増加する。
③いきいき百歳体操や認知症サロンの通いの場が維持・継続できる。
④多世代への認知症サポーター養成講座が開催できる。

地域包括支援センター適正運営評価　評価意見書（総評）

センター名称	姫路市飾磨西地域包括支援センター
評価調査者名	寺岡芳孝　山本礼子　合田美枝子

【第三者評価で確認した特徴的な取り組み、工夫点】

・地域包括支援センターが「地域の総合相談窓口」として認知されつつあり、相談内容も多岐にわたり複合化、複雑化した生活相談も増えている。複数化やチームアプローチでの情報共有や対応に努められている。
・介護予防に関する高齢者が通える場づくり「いきいき百歳体操」や「認知症サロン」などの活動継続を支援し、新たな立ち上げや参加啓発にも努められている。
・地域で暮らし続ける様々なケースでの「地域支えあい会議（１２回）」が関係者と連携して開催されている。
・地域で介護している家族同士の思いや悩みを共感したり情報交換の場として、月１回 「認知症の家族会（ラフラフの会）」を継続的に開催支援されている。

【第三者評価で確認した次のステップに向けた気づきや取り組みを期待したい点】

・生活支援体制整備事業に関しては、若者が比較的多く住む地域・高齢化が進む地域・工場などが多くある地域など、地域の特性や生活意識の違いなど実態に応じた取り組みが求められる。新たな「生活支援体制検討会議」の立ち上げに拘らず、既存の地域組織との融合など柔軟な支援体制づくりに期待したい。
・介護予防や認知症予防の観点から、「地域の通いの場」などでの「フレイルチェツク」の実施や必要に応じた「DASC-21（アセスメントツール）」の活用で、「認知症の早期発見、早期対応」に繋げたり、「リハビリテーション活動支援事業」の活用で、フレイル予防（運動機能維持など）に努めてほしい。

【評価結果に対する地域包括支援センターのコメント】

・特徴的であると評価されたチームアプロ―チで総合相談を受けたり、通いの場づくりや、認知症の家族会（ラフラフの会）を継続、促進できるように、地域包括支援センターの役割や第８期姫路市介護保険事業計画の共通認識を持って日頃の業務を遂行していきます。
・地域の行事などへ参加を続け、足を運ぶ事で地域の方々との顔が見える関係づくりを意識し、「高齢者の相談窓口は包括」である事を啓発して行きます。

【備考・その他】

・飾磨西地域包括支援センターの場所は利便性の良いところにあるが車で訪問する場合東側には案内がなく、西側は建物に大きく案内があるが道路沿いにわかりやすい看板がないため設置されると利用しやすいと思われる。

<table>
<tr><td colspan="3" rowspan="5">評価項目・着眼点</td><td>基本目標1：生きがいを感じながら暮らすための支援の充実</td></tr>
<tr><td>（基本的な考え方）
人生100年時代、介護予防に努め、いつまでも自分らしく、生き生きと暮らすことが大切です。そのために、身近な地域活動への参加を増やし、継続することが必要となります。その生活スタイルを周知するとともに、地域活動の場へ通い続けることができる環境づくり、地域で役割をもって暮らすための地域づくりに取り組みます。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">①</td><td>介護予防に関する認識の変革</td></tr>
<tr><td>85歳以上の高齢者に対し、「通いの場」である「いきいき百歳体操」と「認知症サロン」への参加促進を行い、フレイル予防につなげる。
市民向け講座などでフレイル予防に関する啓発・周知を進めフレイルの危険因子を持つ人等を早期に発見する取り組みを進める。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">②</td><td>高齢者が通える場があるまちづくり</td></tr>
<tr><td>介護予防への意識が高くない高齢者を通いの場に誘導するとともに、フレイル等で通いの場への参加が中断することを予防するための取り組みを充実させる。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">センター記入欄</td><td>取り組みの状況</td><td>いきいき百歳対応を継続できるよう、グループ活動の広報や代表者支援などを行っています。フレイル予防へ意識をもってもらえるように広報誌を作成して地域の回覧版や通いので配布しています。また、地域の健康講座では保健センターと協同して介護予防の啓発やフレイルチェック票の実施にも取り組んでいます。</td></tr>
<tr><td>現在課題と感じていること</td><td>①フレイル予防の周知を行う場所を広げること。
②通いの場の開催場所を増やし、参加者が増えること。</td></tr>
<tr><td>目標達成のための今後の取り組み</td><td>①地域活動に参加する重要性を、地域の高齢者に向けて啓発する。
②いきいき百歳体操に参加されている方に、地域で気になる方への声かけ様子伺いをしてもらい、必要時は地域包括支援センターに連絡を頂き、地域活動への参加を促す。
③フレイル予防の意識を地域の方に持ってもらえるように普及啓発する。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">評価調査者記入欄</td><td>評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点</td><td>いきいき百歳体操20か所及び認知症サロン5か所が活動している。自主的なグループを目指し負担にならないように支えている。新型コロナウイルス感染症対策から活動中止4か所については年度末までには活動につなげていきたいと交渉中である。フレイルチェックリストについては注意リストとして活用している。人の顔も見たくないなど、介護保険を利用してからと消極的な方については無理に参加の呼びかけをしていないが、食事会、グランドゴルフ、囲碁輪投げ、吹き矢等地域のどこかでつながりがある場合がほとんどで情報をいただけることも多く地域力を十分に活用している。</td></tr>
<tr><td>次のステップに向けた気づきや期待したい点</td><td>リハビリテーション支援事業に興味がない、体操だけで良いと思っている方が多く、広報はしているが活動には至っていない。現在活動中のいきいき百歳体操、認知症カフェ等の集いの場から広がる活動や気軽に参加できる通いの場の充実に期待したい。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td colspan="2" rowspan="8">評価項目・着眼点</td><td>基本目標2：困りごとを地域全体で受け止める体制の構築</td></tr>
<tr><td>（基本的な考え方）
日常生活圏域単位に市民に身近な場所への地域包括支援センターの設置を継続し、地域の高齢者、その介護者の生活スタイルに対応できる相談体制の強化を行います。困りごとを抱える高齢者やその家族への支援を行う中で、地域共生社会の実現に向けて、他との連携を進めていきます。</td></tr>
<tr><td>①</td><td>地域包括支援センターの運営</td></tr>
<tr><td>地域包括支援センターが、介護サービスの相談先以外の役割を持っていることを地域で認識されるようになる。</td></tr>
<tr><td>②</td><td>地域包括支援センターの機能強化</td></tr>
<tr><td>地域包括支援センターの専門性を活かした相談機能を強化する。</td></tr>
<tr><td>③</td><td>世代や分野を超えた地域のつながりの構築</td></tr>
<tr><td>地域共生社会の実現に向け他分野との連携を強化する。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">センター記入欄</td><td>取り組みの状況</td><td>校区の民生児童委員研修会や、老人クラブの研修会、連合自治会が開催する健康推進部会等や、社会福祉協議会のふれあい食事サービスやふれあいサロン事業にも開催毎に参加したり、いきいき百歳体操や認知症サロンやその他通いの場や事業所まわり等の機会を通して、地域包括支援センターの活動内容を具体的に周知するとともに、地域と顔の見える関係づくりを意識して活動しています。また包括だよりとして年1回程度、地域包括支援センター内で活動している介護予防や認知症家族会等に関する活動案内を毎月回覧し情報発信を行っています。</td></tr>
<tr><td>現在課題と感じていること</td><td>高齢者の総合相談窓口として住民の方や自治会、民生委員の方や専門職に認識されている一方で、相談内容が複合化・複雑化した生活課題を抱えている相談や相談の解決までに時間を要する事例への対応が増加傾向にあると感じている。また、介護者や学生、子ども等の多世代に向けての地域包括支援センターの啓発活動が十分できていないと感じています。</td></tr>
<tr><td>目標達成のための今後の取り組み</td><td>相談解決に至る支援では、地域包括支援センターが把握している社会資源と相談内容に対する支援の方向性を結ぶ役割が求められており、日常の地域包括支援センターの業務を通した介護保険や障害福祉、医療やその他社会資源に関する情報共有を行うとともに、インフォーマルやフォーマルサービスの機関と、顔が見える関係性を常に作り続けます。また、啓発活動については、中学生への認知症サポーター養成講座の開催等に結び付くように引き続き、働きかけを行います。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">評価調査者記入欄</td><td>評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点</td><td>地域包括支援センターの仕組みや取り組みを地域住民が理解しやすいよう写真やイラストを用いた広報誌「飾磨西ほうかつだより」を年1回1500部発行し地域800か所に回覧している。あわせて地域包括支援センター行事カレンダーを月1回1000部発行し活発な周知活動が行われている。
相談の来所・電話・訪問など件数も多く、多様な内容を地域包括支援センター内で情報が周知共有され、関係機関との連携が図られている。コロナ禍において途切れる事ない顔の見える環境作りを目指し障害事業所や介護保険事業所が集合し協力体制充実のためブロック研修を開催している。</td></tr>
<tr><td>次のステップに向けた気づきや期待したい点</td><td>現在、中学生対象でボランティア啓発活動を民生委員とともに行っているが、今後活発な活動が若い世代に広がることを期待している。地域包括支援センターの場所は利便性の良いところにあるが車で訪問する場合東側には案内がなく、西側は建物に大きく案内があるが道路沿いにわかりやすい看板がないため設置されると利用しやすいと思われる。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td colspan="2" rowspan="4">評価項目・着眼点</td><td colspan="2">基本目標3：地域で暮らし続けるための支援の充実</td></tr>
<tr><td colspan="2">虚弱・軽度要介護者の重度化防止、自立支援のために、地域活動への参加など多様なサービスの活用を図ります。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">①</td><td>多様なサービスの活用</td></tr>
<tr><td>地域の通いの場や多様な主体で展開される介護予防生活支援サービス、在宅医療・介護の連携体制及び認知症高齢者等への支援に係るサービス(地域支援事業)を効果的に活用して、虚弱・軽度要介護高齢者の重度化予防・自立支援を図る。そのために、地域包括支援センターが担う取り組みや事業としては、地域ケア会議推進事業、生活支援体制整備事業、通いの場の充実、認知症の人への支援などがあげられる。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">センター記入欄</td><td>取り組みの状況</td><td colspan="2">校区の自治会長や老人クラブの研修会や会議の中でフレイル予防に関する情報提供や校区内のいきいき百歳体操や認知症サロンについて、地域の通いの場への参加者が増えるように広報活動を定期的に行っています。また、いきいき百歳体操の活動場所へ地域包括支援センターから月１回訪問する事で、参加者が気軽に相談できるような体制をとっています。地域ケア会議は１２回実施しました。
生活支援体制検討会議を行う中で、新たに令和4年度に認知症サロンが立ち上がる見込みになっています。</td></tr>
<tr><td>現在課題と感じていること</td><td colspan="2">①地域活動の場の普及。
②地域活動への参加の重要性について啓発すること。</td></tr>
<tr><td>目標達成のための今後の取り組み</td><td colspan="2">①虚弱・軽度要介護者の相談場所が地域包括支援センターであることや、地域活動に参加する必要性を普及啓発します。
②地域活動の場を広げ、継続できるように支援します。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">評価調査者記入欄</td><td>評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点</td><td colspan="2">「地域支えあい会議」を地域差はあるものの12回開催した。昨年度の地域支えあい会議の中でハラスメント事例があり、今後同様事例が地域で発生する可能性が高いため地域に向けて情報周知を行った。自治会会議、各種会合や集いの場に積極的かつ定期的に参加しているが連合自治会議は忙しく改めて集いの場を作っていくのは現実無理だと考えている。既存の老人クラブ等有効活用し連携の基盤の構築が図られている。また、コロナ禍以前は保育園のバザーに参加するなど地域活動が行われていた。</td></tr>
<tr><td>次のステップに向けた気づきや期待したい点</td><td colspan="2">若者が多く住む町・高齢化進む町・工場が多くある町など地域の特性により意識レベルが違うため、それぞれに合った対応が現状でも行われてはいるが、今後さらなる地域活動への参加や通いの場の充実を期待する。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="7">評価項目・着眼点</td><td colspan="3">基本目標4：認知症とともに暮らす地域の実現</td></tr>
<tr><td colspan="3">認知症は誰もがなりうるものであり、認知症になっても、住み慣れた地域の中で尊厳が守られ、自分らしく暮らし続けることができる共生社会を目指します。また、認知症の発症を遅らせることができる可能性が示唆されていることを踏まえ、予防（認知症になるのを遅らせる。認知症になっても進行を緩やかにする）に関する取り組みを推進します。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">①</td><td colspan="2">認知症にやさしい地域づくり</td></tr>
<tr><td colspan="2">認知症サポーターが地域で活躍できる機会の充実を図る。認知症の人本人が、自身の希望や必要としていること等を本人同士で語り合う場を設置する。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">②</td><td colspan="2">認知症になるのを遅らせるための取り組み</td></tr>
<tr><td colspan="2">高齢者が身近に通える場等の拡充。通いの場を活用し、認知機能低下がある人や、認知症の人に対して、早期発見・早期対応が行えるよう、医療機関とも連携した支援体制の整備。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">③</td><td colspan="2">認知症になっても地域で暮らし続けるための取り組み</td></tr>
<tr><td colspan="2">認知症の類型や進行段階、生活環境に応じた適時・適切な医療・介護に提供が出来るようになる。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">センター記入欄</td><td>取り組みの状況</td><td>校区で開催している認知症サロンを定期的に訪問し、参加者へ認知症や早期発見や対応の必要性や予防等について啓発を行っている。また、年1回、認知症に関する講話やフレイルチェックを実施しています。認知症サポーター養成講座は公民館講座や認知症サロンで実施しました。
「認知症の家族会」を月１回開催し、介護している家族同士の思いや悩みを共感したり情報交換の場となっている。
地域のコンビニエンスストアや薬局などを訪問し、認知症の方への対応や見守り等の協力依頼を行った。</td></tr>
<tr><td>現在課題と感じていること</td><td>①多世代に向けた認知症の啓発
②フレイルチェック票を認知症サロンで実施したが、対象者に向けた積極的なかかわりはできていない。
③見守り・SOSネットワーク事業や認知症にやさしい事業所などの周知は、地域に十分に広がっていない。</td></tr>
<tr><td>目標達成のための今後の取り組み</td><td>地域住民や医療機関、金融機関、店舗等の訪問を継続し、認知症になっても地域で暮らし続けるための啓発や連携に取り組んでいきたい。
認知症サロンや地域の通いの場に定期的に訪問し、地域包括支援センターが認知症に関する相談窓口であることを知ってもらったり、気軽に相談できる関係性の構築に努めて行きたい。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">評価調査者記入欄</td><td>評価で確認した特徴的な取り組みや工夫点</td><td>警察、事業所、郵便局、コンビニエンスストア等から認知症の相談が月約80件、年単位では1000件以上あり右肩上がりである。相談内容対応については連絡伝達会議にて職員で共有し、支援が必要な事例を事業所等から情報収集し連携を図って対応している。現時点初期集中支援会議は開催されていないが保健センターと相談訪問を継続中である。認知症の家族会「ラフラフの会」を月1回開催している。今年度入院先の病院から相談があり、成年後見支援センターに繋げた事例がある。必要があれば社会福祉協議会の日常生活自立支援事業についてもお知らせしている。認知症サポーター養成講座が認知症サロン、公民館で開催された。社会福祉協議会を通して中学生へ認知症サポーター養成講座を計画中である。</td></tr>
<tr><td>次のステップに向けた気づきや期待したい点</td><td>現在、利用されていない地域のケアパス「私のオレンジ手帳」を活用することで、地域に合ったケアパスの復活を期待したい。</td></tr>
</table>